本編⑬「第一大『犍度』」その２「ふたたび第一人者の宣言」2020.9.19

①菩提樹下で結跏趺坐し、七日間、解脱の楽を感受 vimuttisukha-paṭisaṃvedī。
②**北方向に立って uttaradisābhāge ṭhatvā**、菩提樹を瞬きしない両目で見つめながら［第二の］七日間を過ごした bodhirukkhaṃ ca animmisehi akkhīhi olokayamāno sattāhaṃ vītināmesi。その場所には「瞬きしない霊地」という名前がついた。
③［悟りを開いたとき］結跏趺坐していた処と［菩提樹を見つめるために］立っていた処との間を行ったり戻ったりして「宝の経行処」で経行しながら［第三の］七日間を過ごした pallaṅkassa ca ṭhitaṭṭhānassa ca antarā puratthimato ca pacchimato ca āyate ratanacaṅkame caṅkamanto sattāhaṃ vītināmesi.。その場所には「宝経行霊地」と名前が。
④**西の方向に pacchimadisābhāge** 天人たちが宝の家を作り、そこに結跏趺坐で座って、アビダンマ蔵を特にここで、あらゆるやり方ですべての発趣（始まり）を考察しながら ananta- naya-samantapaṭṭhānaṃ vicinanto 七日間を過ごした。その場所は「宝の家霊地」。
⑤三昧より起ち、菩提樹下から出て、（菩提樹の**東側にある puratthimadisābhāge**）アジャパーラニグローダ樹の下に赴き、アジャパーラニグローダ樹の下で趺坐し、七日間、解脱の楽を感受。
⑥三昧より起ち、アジャパーラニグローダ樹下から出て、ムチャリンダ樹、、、結跏趺坐、、、七日間、、、。ムチャリンダ樹は大菩提樹の**東のコーナーpācīnakoṇe**。
⑦三昧より起ち、ムチャリンダ樹下から出て、ラージャーヤタナ樹、、、。
（ラージャーヤタナ樹は大菩提樹の**南の方向に dakkhiṇadisābhāge** 立っていた。
天界の王サッカは釈尊がそろそろ食事すべきと思い、薬草とカシの実 osadhaharītaka をお布施した。それを召し上がって身体の機能 sarīrakicca があり、口を漱ぐ水をサッカが与え、それで口を漱ぎ、それからラージャーヤタナ樹の下に結跏趺坐した。）
そのとき、タプッサとバッリカの二人の商人 vāṇija が、、、
釈尊の前に出て、「私たちの利益のためにお受けください」と。、、、
釈尊が食し終え、鉢と手を洗い終わったところで、頭を両足に着け：
「私たちは世尊と法に帰依します ete mayaṃ bhante bhagavantaṃ saraṇaṃ gacchāma dhammañ ca。世尊は、私たちを在家信者としてお認めくださいますように upāsake no bhagavā dhāretu。今日より命終わるまで帰依します ajjatagge pāṇupete saraṇaṃ gate」。
二人は二帰依を唱えた最初の在家信者となった teva loke paṭhamaṃ upāsakā ahesuṃ dvevācikā。

〇悟りの道を解き明かすことを決意
七日が過ぎてラージャーヤタナ樹の下から出て、（また）アジャパーラニグローダ樹の下に行き、思念した。**（諸仏は必ずそう思念する。）**

「私のこの法は myāyam dhammo、、、智者に（のみ）理解できる paṇḍitavedanīyo もの。しかし衆生は ālaya（愛着［する対象］）を喜び、法を説いても疲労するだけ。この法は（世間の）流れに逆行するもの paṭisotagāmin」。

→梵天サハンパティがその意志を知って、梵天界から瞬時に尊前に現れ、三度、説法を直訴し、三度目に、仏眼 buddhacakkhu で世間を見ると、利根の者、教導しやすい者 su-viññāpaye、他世と罪過の怖畏を知る者 paraloka-vajja-bhaya-dassāvino を見た。サハンパティに偈で宣言：
「その者らに不死の門が開かれた。誰であれ耳ある者は確信を解脱せよ。
Apārutā tesaṃ amatassa dvārā, ye sotavanto pamuñcantu saddhaṃ.」

〇誰に最初に法を説くべきか
アーラーラ・カーラーマ仙は賢者であり、法を説けば速やかに悟るであろう。しかし天人が身を現さず声だけで「彼は七日前に亡くなった」と告げ、世尊自身もそれを［他心通で］知った。「彼は大いなる損失をした」。
ウッダカ・ラーマプッタ仙は賢者であり、、、「昨夜、、、」「大いなる損失、、、」。
藤本：両師は出家してすぐの師。無所有処定と非想非非想処定。
四十九日間の独定がなければ間に合った？　語られない。縁がないとはそういうもの。
※歴史のないインドで仏教にだけ歴史的事象が厳密に伝承されている。今後も出てくる。「年代記」として一本にまとめられるのではなく、経や律やそれらの因縁譚や後のアビダルマや註釈文献にちりばめられ、それらを渉猟すると、一本の年代記になる。
※なぜバラバラに？　パズルのピースのようにわざとあちこちちりばめたかも。
→現代の学者は、パーリ仏典の先後関係や成立年代を、大乗や他宗教の文献と同様に相当の年代幅（数百年間）を経て成立したと想定する。そうでないと、これだけ緻密な教えは出来上がらないだろう、と。
しかし、ある歴史的出来事（コーサラ王パセーナディとの交流とか）や教えの内容（十二因縁、四沙門果、五道輪廻、三界など）を基準にテキストの先後関係を測ろうとしても、それらが細切れにあちこちのテキストに縦横無尽に出てくるので、先後関係をうまく確定できない。（×「韻文経典が古く散文経典は新しい」CiNii 藤本晃で探して♡）
歴史的事象や仏教思想は、数百年かけて徐々に成立したものが順次テキストになったと見るよりも、最初からきっちり出来上がっていたものが、各テキストで自由に必要な部分だけ説かれまとめられたと考える方が、自然で事実に近かろう。
特に、思想内容は不変だが、歴史的事象は、簡略版、詳細版、中抜き省略版など多様。
編集した阿羅漢聖者たちは、偽造捏造をさせないように、さらに、疑われないように、逆にわざと、パズルのように思想や歴史事象をテキスト中にちりばめたのではないか？

〇五群比丘に最初に説法

「五群比丘は私に仕えてくれた。彼らに最初に説法しよう。どこにいるだろうか？」清浄な超人的天眼で dibbena cakkhunā vusuddhena atikkanta-mānusakena 探してバーラーナシーにいると分かった。ウルヴェーラー村に随意に留まってから、バーラーナシーに出発した。（旅程十日くらい？）

〇途中で邪命外道ウパカとの対話

菩提樹とガヤーの間を（ちょうど出発したところを［旅の途中ではなく転法輪を決断してすぐ］）邪命 ājīvika 外道のウパカが見て、

「あなたの諸根は澄み渡り、肌の色は清浄。誰によって出家したのか。誰を師と為すのか。誰の法を愛楽するのか」（後にサーリプッタ尊者が五群比丘の一人アッサジ長老を見て問うたのと同じ言葉）と。世尊の答えは「天上天下唯我独尊」のよう：

「天上天下唯我独尊」の偈（『中部』１２３経「稀有未曾有経」）は：
私は世界の第一人者。最年長者。最勝者。これが最後の生。今や再生はない。
Aggo ham asmi lokassa, jettho ham asmi lokassa, settho ham asmi lokassa,
ayam antimā jāti, natthi dāni punabbhavo.

「私は一切勝者にして一切知者である。何ものにも染まらない。
sabbābhiññū sabbavidū ’ham asmi, sabbesu dhammesu anupalitto.
一切を捨て、渇愛尽き、解脱した。自ら悟ったので誰を［師と］仰ごうか。
Sabbañjaho taṇhakkhaye vimutto, sayaṃ abhiññāya kam uddiseyyaṃ.
私には師もなく、私に等しい者もなし。Na me ācariyo atthi, sadiso me na vijjati.
人天界に私に比肩する者なし。Sadevakasmiṃ lokasmiṃ n’ atthi me paṭipuggalo.
私こそが世で供養を受けるに相応しい者。私が無上の師。
Ahaṃ hi arahā loke, ahaṃ satthā anuttaro,
私一人が正等覚。清涼寂静なり。Eko ’mhi sammāsambuddho, sītibhūto ’smi nibbuto.

（以上が天上天下の偈と通じる。以下、初転法輪の宣言。
つまり、これはウパカに対する「初転法輪の前の失敗した説法」ではなく、
世間に対して、**悟りに生まれてからの**「唯我独尊の偈」。）

法輪を転ずるため、カーシー［国］の都（バーラーナシー）に行きます。
Dhammacakkaṃ pavattetuṃ gacchāmi kāsinaṃ puraṃ,
盲暗の世で不死の鼓を打ちます。
Andhabhūtasmi lokasmiṃ <u>āhañ hi</u> [註釈の原文は ahaññim] amatadudrabhin.」

・ウパカがふたたび問う：
「友よ、あなたが自称するとおりなら、あなたが無辺の勝者でしょうねえ。
Yathā kho tvaṃ āvuso paṭijānāsi arah’ asi anatajino ti.」
・釈尊の返答：
「誰でも諸漏の滅尽を得た者は、私と同じく勝者です。
Mādisā [maṃ-dṛś] ve jinā honti ye pattā āsavakkhayaṃ,
私は、悪法に勝ったので、ウパカよ、勝者なのです。
jitā me pāpakā dhammā tasmāham Upaka jino.」

ウパカは「そうだといいね hupeyya [bhavati opt.]」と頭を振り、別路に去った。